

パロディされる恋愛

金子みすゞ「さみしい王女」

藤本 恵

Ⅰ みすゞの詩法と「さみしい王女」

次にあげる「大漁」は、みすゞテキストの中で最もよく知られたものの一つだろう。

朝焼小焼だ
大漁だ
大羽鱈の大漁だ。

濱は祭りの
やうだけど
海のなかでは
何萬の
鱈のとむらひ
するだらう。¹⁾

ここでは浜から海へ視点を転換することによって、読者の常識、既成概念が転覆される仕組みになっている。みすゞは、このような詩法を得意としており、例えば「さみしい王女」にも同じ特徴を見ることができる。

つよい王子にすくはれて、
城へかへつた、おひめさま。

城はむかしの城だけど、
薔薇もかはらず咲くけれど、

なぜかさみしいおひめさま、
けふもお空を眺めてた。

(魔法つかひはこはいけど、
あのはてしないあを空を、
白くかがやく翅のべて、
はるかに遠く旅してた、
小鳥のころがなつかしい。)

街の上には花が飛び、
城に宴はまだつづく。
それもさみしいおひめさま、
ひとり日暮の花園で、
真紅な薔薇は見も向かず、

お空ばかりを眺めてた。

一読して、この童謡には「眠りの森の美女」「シンデレラ」「白雪姫」など馴染み深いメルヘンの話型、即ち、窮地に陥った少女が王子によって救われ、幸せな結婚をするという形がふまえられていることがわかる。しかし単にその話型を反復しているのではなく、「さみしい」と感じるおひめさまの視点を導入することによって、メルヘンの常識である結婚というハッピーエンドが裏切られている。このように、原典・典拠を持ちながら、それとの差異を強調するレトリックを〈パロディ〉と呼ぶ。レトリックとしての〈パロディ〉は、一般的なイメージと異なり、必ずしも笑い、嘲笑を目的としない。〈パロディ〉の効果としては、まず、よく知られたテキストを下敷きとすることで、読者が新たなテキストに親しみやすくなること。次に、下敷きにしたテキストとの違いを持つことで、それに対する批判意識を示せること。以上二点が挙げられる。²⁾

みすゞがパロディの原典としたようなメルヘンの話型は、長い間、自明で普遍的なものと信じられてきた。この話型が、実は近代人の恣意による改編を受けたものと意識され、それが「日々の行いや役割認識のあり方をも大きく左右している」³⁾ことが指摘されたのは第二次大戦後のことである。メルヘンの提示する役割認識や社会通念を「眠りの森の美女」などの話型に即してまとめると、次のようになる。まず、王子即ち男性は、能動的に行動するものであり、王女即ち女性は、受動的に救いを待つものであるという役割認識を示す。そして、女性にとっての恋愛と結婚を解放と幸福の契機として価値付ける。このような話型を持つメルヘンが批判的に読み直され、新たなメルヘンが創作されていく。賢い王女が求婚者を退け、自らの力で危機を打開していく『アリーテ姫の冒険』が日本に紹介され、話題になったのは、1980年代末のことである。みすゞは、ごく早い時点で、メルヘンを批判し得る再創造を実現していたことになる。

みすゞは「空いろの花」でも、「さみしい王女」と同じパロディというレトリックを用いて、恋愛と結婚を至上のものとする童話を批判している。⁴⁾このように、みすゞテキストに表れたパロディという手法、女性にとっての恋愛・結婚の価値を相対化する、その意義がフェミニズムの見地から評価されることはほとんどない。なぜ評価されないのか、その理由を確かめるために、みすゞをめぐる言説が形成されていく状況を検証する。

II 金子みすゞをめぐる言説

はじめに、みすゞの人生がどのように語られるのかを見ておきたい。周知のように、金子みすゞ（本名：金子テル）は薬物自殺を遂げる。それを報じる1930年3月12日付「防長新聞」の記事は、自殺の原因を「内縁を結んでみた」男に「捨てられたのを悲観したため」とする。みすゞは、実際には正式な結婚生活を送った末、協議離婚しており、これは明らかに誤報である。この誤報が通用する背景には、まさにメルヘンが提示するような女の一生についての常識—女にとっては恋愛・結婚が人生の中心であるから、男に捨てられれば命を失ってもおかしくない。自殺するような女は、「内縁」という後ろ暗さや「捨てられ」たという不幸を負っているはずだ—があるだろう。一女性としてのみすゞの人生は、女の一生を男との関係即ち恋愛と結婚で評価する常識の論理に絡め取られている。

みすゞの人生と童謡を発掘し、みすゞ再評価のきっかけをつくった児童文学者・矢崎節夫は著書『童謡詩人金子みすゞの生涯』（JULIA出版局 1993）の中で、同じ記事を「男尊女卑の精神」という言葉で非難する。一方、みすゞと夫（啓喜）の結婚生活が破綻した原因を、みすゞに「本当の意味での恋」が欠如していたために、母を亡くしたさみしさから女性に「母がわり」を求める夫の期待に応えられなかったためと推論している。これは、恋愛の有無で妻（女）としての価値を計るという基準に従って為されたものである。こうした推論のあり方は、恋愛の破局と女の死を直結する（女の一生を恋愛で計る）新聞報道と地続きなのではないか。結局、こうして記録された人生において、金子みすゞは恋愛と結婚によって価値付けられる〈女〉なのである。

では、みすゞの童謡はどのように評されるのか。みすゞが投稿した童謡が雑誌「童話」にはじめて掲載された際、選者・西條八十は「言葉や調子の扱い方」を批判し、「ふつくりした温かい情味」⁵⁾を評価した。技術面を批判し、情緒面を評価するというパラダイムは、数十年たった現在でも基本的には変わっていない。現代におけるみすゞ評価のパラダイムが形成されていく様を見るうえで興味深い座談会に「金子みすゞとその時代」⁶⁾がある。ここでは、与

田準一や巽聖歌ら同時代の男性詩人と比べ「リアリズム」や「写実精神」に劣るということで、みすゞの「テクニシャン」である一面が批判的に言及され（上笙一郎）、みすゞは「客観的な事物の認識よりも心情で書いた」と指摘された（関秀雄）うえで、「大漁」について次のような議論が交わされる。

関 海の中では何万のいわしのとむらいするでしょう、と、それは飛躍だけれどやはり理屈じゃないですね。人と魚を同列において、陽の対極の陰をうたう、そのコントラストが詩を生んでいる。ふつうの世界の裏がわに見つけたものを自分のイメージで表現せずにいられないわけでしょう。

浜野 だからね、それをいられないと取るか、もっと意地悪くそれをそういう一つの技法で、いつもそういうものの見方で、それを技術としてつねにそれをを用いて来たかということが評価の分かれめだけれどもみすゞの場合はそうじゃないと、彼女の地のものだとお考えになるでしょう。

関 そう思いますね。

武鹿 私もそう思います。みすゞの優しさは天性のもので、技術というようなこととは遠いと思います。

Iで確認したように、視点の転換によって、読者の既存概念を転覆していくのは、みすゞテキストの特徴と言える。しかし、ここでは、それを技法として認めれば価値が下がるとされており、「地のもの」「天性のもの」と解釈することによって、高く評価されている。結局みすゞは、「客観的な認識」に基づく「リアリズム」や意図された「技術」ではなく、「優しさ」という感情的な言葉で特徴づけられる。上笙一郎は、みすゞが童謡というジャンルを選んだ理由について考察する際、「女だから評論やエッセイに向かわなかった」という発言をしている。みすゞに対する特徴づけが、客観、技術（散文）—男、主観、感情（韻文）—女という文学ジャンル上のジェンダー観に従って為されていることは明らかだろう。

III みすゞ論のパラダイムとみすゞテキスト

みすゞテキストを〈女〉側に囲い込んで評価する傾向は継承され、「独自の優れた感性は持っている、語る為の語彙力を男性詩人ほどには持つことができなかつた」⁷⁾「感覚の共有によって作品に触れた者の心の一部分を共鳴させる」⁸⁾「澄んだ眼と優しさ、これがみすゞの詩の根底をなしている」⁹⁾という評言を続々と生んでいる。心情と感性に訴えるみすゞテキストは、さらに「癒しの効果」¹⁰⁾を読み込まれ「母性」¹¹⁾という象徴的な語を貼り付けられる。こうしたみすゞ論を見渡すと、現在みすゞテキストの役割とされているのは、優しく清らかな感性で自然を守り、育て、現代人と現代社会に救いをもたらすことのようなのである。

多くの場合「私」「女の子」を視点人物とするみすゞテキストは、確かに、女というジェンダーを選択し、演じている。しかし、そこで為されたのは、少女のような無垢あるいは優しい母性といった既成のジェンダーを補強するのに都合の良い発言だけではない。みすゞテキストは、ジェンダーの内部に入り込み、その深部から、ジェンダーの限界を告発し、異を唱え、私たちの概念を揺るがそうとしているように見える。

「さみしい王女」をもう一度振り返ろう。「さみしい王女」のおひめさまは、王子に「すくはれ」という受け身形で、自身に選択権のない出会いと結婚を受け入れている。しかし王女としての役割を受け入れたその地点から、かつて自力で「はるかに遠く旅」をした経験をしてこに、結婚の価値を相対化する。役割に身を投じることで、王子との出会いが解放ではなく幽閉に通じるものであるということ、結婚が幸福ではなく自らの力を発揮できない寂しさにつながるものであることを示している。

みすゞテキストには例えば、次のようなものもある。

女の子

女の子って
ものは、

木のぼりしない
ものなのよ。

竹馬乗つたら
おてんばで、
打ち獨樂するのは
お馬鹿なの。

私はこいだけ
知つてるの、
だつて一ぺんづつ
叱られたから。

ごく短いテキストだが、「女の子」らしさ（ジェンダー）が「叱られ」ること、即ち他者の力によって形成されることをさりげなく告発している。さらに「小さなうたがひ」では、「あたしひとりが／叱られた。／女のくせにつて／しかられた。」と、形成された非対称的なジェンダーのもたらす不平等感も伝えている。

矢崎が「人間中心の目の位置をひっくり返してくれ」¹²⁾る、即ち価値観の転倒という点で高く評価した「大漁」は、代表作として多くのみすゞ論に引用されるのに対し、既存の価値観を転覆するという点では同じ意味を持つはずの「さみしい王女」については、ほとんど論及されない。この状況はそのまま、現在のみすゞ論の地平を物語るのではないだろうか。みすゞ論のパラダイムにおいては、金子みすゞは、人間と自然に関する常識を覆してもよいが、女に関する常識を覆してはいけないことになっているのである。

みすゞの人生は、結婚による不幸即ち女としての不幸に収斂され、みすゞの童謡は、無垢や母性といった役割を担わされがちである。いわゆる〈女〉として捉えられてきたみすゞは、テキストにおいて、恋愛・結婚という女の幸せを相対化し、ジェンダーに疑義を唱えていた。このことを、みすゞテキストの新たな可能性として強調しておきたいと思う。

注

- 1) テキストの引用は全て『金子みすゞ全集ⅠⅡⅢ』（JULIA出版局 1984）による。
- 2) リンダ・ハッチオン『パロディの理論』（辻麻子訳 未来社 1993）、青山友子「現代パロディ考」（『日本研究教育年報』1999.3）などによる。
- 3) ジャック・ザイプス『赤頭巾ちゃんは森を抜けて』（廉岡糸子・横川寿美子・吉田純子訳 阿吽社 1990）
- 4) これについて詳しくは、拙論「金子みすゞと大正期児童文学—空いろの花のレジスタンス」（お茶の水女子大学国語国文学会「国文」1998.7）をご覧ください。
- 5) 「童謡」（1923.9）。なおこのとき西條八十は、みすゞを「関秀の童謡詩人」と呼んでおり、このことはみすゞが置かれ、期待された位置を示唆しているだろう。
- 6) 初出は「日本児童文学」（1989.9）。後に「文藝別冊 総特集 金子みすゞ」（河出書房新社 2000.1）に再録された。参加者は関秀雄、上笙一郎、武鹿悦子、浜野卓也と、いずれも児童文学の分野で名を馳せた人々である。
- 7) 荻田郁子「金子みすゞ、母への憧憬」（大阪藝術大学藝術学部文藝学科研究室「河南大学」1997.10。引用は、前掲「文藝別冊 総特集 金子みすゞ」による。）
- 8) 児玉喜恵子「灰撒く詩人・金子みすゞ」（詩と詩論研究会編『金子みすゞ 詩と真実』勉誠出版 2000）
- 9) 詩と詩論研究会「はじめに」（詩と詩論研究会編『金子みすゞ 永遠の母性』勉誠出版 2001）
- 10) 岩見幸恵「金子みすゞとマザーグース—シークエンスする世界—」（前出『金子みすゞ 永遠の母性』）
- 11) 注9、10にあげた書名による。
- 12) 『童謡詩人金子みすゞの宇宙—みんなちがって、みんないい—』（明治図書出版 1996）